

第 4 章 結 語

広原横穴群の調査は、共同墓地改葬事業による削除という事件によって行われたものであり、本来ならば保存されていかなければならないものであった。しかし、第1号、第3号に線刻画を確認し得たことは、これまで宮崎地方に稀薄であるといわれてきた装飾古墳に、その類例を加えることができたことは意義深いものであろう。

さて、横穴の構築時期であるが、大半が削除を受けているため、構造上からは判断し難い。

遺物についても、以前から開口していることもあって、後世になって盗掘も多分に受けているものと思え、出土が稀薄であった。したがって、構築年代を決める資料に乏しい状況を呈している。

第1号横穴 構造が残っている横穴である。玄室床面が縦長の長方形を呈し、羨道部との区画(袖部)が退化現象にあることや、天井部が切妻型から鈍角を成すドーム状に移行していることなどから、構造上からは横穴の終末期に相当するものと思える。また、遺物の須恵器は、胴長の深鉢状を呈しており、須恵器編年からすると、Ⅶの時期に相当するものと思える。以上のことから、この横穴は8世紀中葉時期に構築されたものと思える。

第2号横穴 玄室床面は、方形状を呈し、袖部はそれほどの退化現象はみられない。遺物は、土師器と須恵器の2点のみである。

土師器は、低い高台をもつ皿状のもので、須恵器は、外面を横目叩き、内面を同心円文叩き、黒色の自然釉が付着したもので、甕形土器を呈するものと思える。須恵器編年から考えると、Ⅶの時期に相当するものと思え、8世紀中葉時期の構築と思われる。

第3号横穴 玄室床面は、方形状を呈し、天井部がドーム状を呈すると思われる。遺物は、須恵器のみで、身受けのみられる埴蓋、高台付の埴身、外面横目叩きで、内面に同心円文叩目のみられる甕形土器がみられる。須恵器編年から考えると、Ⅶの後半からⅦの時期に相当するものと思え、8世紀の前葉から中葉時期の構築と思われる。

第4号横穴 削除が著しく構造は判然としない。遺物は、須恵器と土師器がみられる。須恵器は、坏身と壺形土器の底部と思われるものがあり、土師器には低い高台付の盤がみられる。須恵器編年から考えると、Ⅶの時期に相当するものと思え、8世紀の中葉時期の構築と思われる。

第5号横穴 天井部、側壁については削除を受けているが、床面については良く残されている。床面は、縦長の長方形を呈し、袖部もはっきりしている。遺物は須恵器と土師器がみられる。須恵器は、身受けのある坏蓋、身受けがなく天井部ツマミを有する埴蓋、高台付きの埴身があり、土師器には埴蓋がみられる。須恵器編年から考えると、Ⅶの時期に相当するものと思え、8世紀の中葉時期に構築されたものと思われる。

第6号横穴 削除が著しく構造は判らない。遺物は、須恵器のみで、天井部ツマミを有する埴蓋、高台が付くものと思われる埴、底部にヘラ記号を有する坏身がみられる。須恵器編年から考えるとⅦの時期に相当するものと思え、8世紀の中葉時期に構築されたものと思われる。

以上のごとく、各横穴の構築時期を試みたのであるが、前述したごとく構造上、遺物の稀薄さとい

う制約から正確なものとはいえない。

遺物を全体的にとらえてみると、①須恵器に比して土師器の混入度が非常に低くなること。②須恵器の中でも埴身、埴蓋が主体を成し、内面外面に叩目を有し黒色の自然釉が付着した甕等を共判すること。③武具や農耕具等の鉄製品や装身具等については、1点もみることができないこと等によって、薄葬となった古墳時代終末期から歴史時代への様相を強く呈していることがいえよう。

壁画については、祝田横穴の南1号(註8)の線刻壁画が、6世紀後半から6世紀末、旭台地下式横穴古墳の朱線による形象壁画が古墳時代後期でも前半に属することなどから、広原横穴の線刻画を8世紀の中葉と比定するならば、現在のところ古墳における壁画の描かれた時期の下限とみて良いものであろう。また、8世紀ともなると歴史時代に入っているわけであるが、宮崎においては依然として古墳時代の終末期を存続させていることは、特徴的な事柄というべきものであろう。

註

- 1) 第1章の歴史的環境については、平部嶺南著「日向地誌」(昭和48年12月復刻版、青潮社)の廣原村の部を参考とした。
- 2) 石川恒太郎「地下式古墳の研究」ぎょうせい刊(昭和48年12月)
- 3) 「下北方地下式横穴第5号」宮崎市文化財調査報告書第3集(1977)
- 4) 曾我部長良「日向の横穴」(昭和50年10月)P.301
- 5) 「宮崎県文化財調査報告書」第19集 宮崎県教育委員会(昭和51年度)
- 6) 「史蹟名勝天然記念物調査報告書」第十三輯(六野原古墳調査報告)宮崎県(昭和19年)
- 7) 「宮崎日日新聞」記事(昭和53年8月30日付)
- 8) 鈴木重治「宮崎県下の原始絵画」(Ⅲ. 原始時代の絵画、横穴線刻画の新例)『古代学研究』第45号(1966年9月)
- 9) 第5章「結語」に使用している須恵器の編年は、小田富士雄「天観寺山窯跡群」北九州市埋蔵文化財調査会(1977年)の豊前地域古窯跡出土須恵器編年図(1977年8月現在)を参考とした。